

# 1930年前後における木村文助の綴方教育論

太郎良 信\*

## A Study on the Writing Pedagogy of Bunsuke KIMURA around 1930

Shin TAROURA

**要旨** 木村文助が1920年代の自らの綴方教育の理論と実践を集大成した『村の綴り方』（1929年）等は1930年代初頭における綴方教育界において衝撃的に受け止められる反面、社会の現実や貧困の問題をも綴らせることに対する批判も出された。綴方教育界においては、そうした問題の生じる恐れのない調べる綴方が大流行現象を示した。木村は、自らの綴方教育論を再整理して、調べる綴方のような実用綴方の役割を位置付けるとともに、改めて、自己創造につながる文芸綴方の持つ意味を主張していくこととなる。本稿は、その再整理の過程を検討したものである。

**キーワード**：木村文助 綴方生活 小砂丘忠義 プロレタリア綴方 調べる綴方

### はじめに

本論文は、木村文助（1882-1953）の1930年前後における綴方教育論について検討をおこなうものである。

木村は、1900年代から1930年代に至るまでの間、綴方教育実践のあり方を模索するとともに、歴史的・理論的な考察を重ねていた。木村が小学校教員となった1902（明治35）年は、1900年の小学校令改正によって従来の「作文」が国語科のなかの「綴り方」として再発足して間もなくの時期であり、教科書のない綴方教育のあり方をめぐって試行錯誤が始まった時でもあった。こうした綴方教育のあり方を模索せざるを得ないという現実的な必要と、自然主義文学に出会ったことが、木村に綴方教育における実践的な模索と歴史的・理論的な考察を促すこととなったものとみられる。

その木村の綴方教育の実践と理論において、

1930年前後は、それまでの成果を整理し1930年代における新たな展開に向けての画期となった。ここでは、その画期となったものについて検討していく。

### 第一章 木村における1930年前後の時期

1930年前後の時期において、木村の綴方教育論に関わるできごとは、著書『村の綴り方』（厚生閣、1929年）を出版したこと、綴方教育における鈴木三重吉との師弟関係が解消されたこと、1929年10月に創刊された『綴方生活』（文園社）の誌名は木村の『綴方生活 村の子供』（文園社、1927年）に酷似したものであったこと等であろう。

#### 第一節 綴方教育における鈴木三重吉との師弟関係の解消

『赤い鳥』綴方と生活綴方との関係に関して、木村が『赤い鳥』綴方から生活綴方への「かけ橋

\* たらうら しん 文教大学教育学部発達教育課程初等連携教育専修

の役割」を果たした<sup>1)</sup>とする評価がなされてきた。たしかに、木村は、1920年代においてはその指導した綴方が数多く『赤い鳥』に入選しており、『赤い鳥』主宰者の鈴木三重吉と木村は綴方教育において師弟関係にあると自他ともに認めるものであった。そして『赤い鳥』がいったん休刊していた時期に創刊された『綴方生活』（文園社、1929年10月創刊）に木村は寄稿するようになり、その後も引き続き寄稿していることは確かである。こうしてみると、たしかに『赤い鳥』から生活綴方運動の契機となった『綴方生活』に木村の関わりは移っている。しかし、「かけ橋の役割」というとき、『赤い鳥』と『綴方生活』の「かけ橋の役割」ということではなく、綴方教育論として、『赤い鳥』綴方と生活綴方の「かけ橋の役割」、あるいは『赤い鳥』綴方から生活綴方への「かけ橋の役割」を果たしたという評価によるものであろう。その前提には、当初、木村は綴方教育論において『赤い鳥』の鈴木三重吉の綴方教育論の体現者であり、その後生活綴方に移行したという見方がある。

ここで、綴方教育における三重吉と木村の師弟関係の解消の理由についてみていくこととする。木村は、三重吉の綴方教育論に言及した際に「嘗て『社会的実用的の存在性』を某紙に述べたといふ廉で大に逆鱗に触れた<sup>2)</sup>」と1938年に記しており、三重吉の怒りがあったということは確かとみられるが、掲載紙誌名は未詳である<sup>3)</sup>。そうしたなかで、木村の長男で、1930年以降に三重吉に師事した木村不二男<sup>4)</sup>の次のような証言が三重吉の怒りの原因についての手がかりを示してくれる。

「潔癖な三重吉はこの『綴方生活』を眼のカタキにしていたが、三重吉文助晩年の疎外もこれから、すなわち文助が何の気もなくわが寄稿ののったこの雑誌を師に送ったことが、一切の原因である<sup>5)</sup>」

この叙述は、木村が雑誌『綴方生活』に寄稿して、その掲載誌を三重吉に送ったことが三重吉と

の師弟関係の解消にいたる原因となったとするものである。ただし、その寄稿の内容への言及はない。同時期の『綴方生活』を検証すると、該当するとみられる木村の一文は、「綴方座談会所感」（『綴方生活』1930年2月号）のみである。その一文を三重吉の綴方教育論との相違を念頭におきながらみていくと、木村が、綴方は生活の再現ではないとして次のように論じているところが見出される。

「綴方の（表現）の対象となるものは生まの現実から進んだ観照の世界である、価値的な選択を経た滋養の成果である、単なる生活の再現と見ゆる事でも只単にそれ丈ではない。若し夫れ丈に止つてゐるならば、無意味、無価値の報道にすぎない。自己行為の凝視あり、反省あり、従つて必ず心的発展が伴はるべきである、かくしてかうした事を逆に現実生活に及ぼし将来之を訂正し善き影響をさせるものでなければならない<sup>6)</sup>」

木村において、綴方とは作者が自分の生活を再現しただけのものではなく、綴る際には凝視や反省をとまなうものであり、綴るということがその後の作者の生活に影響をあたえるものであり、そうでなければならないとするものであった。こうした綴方教育論は、綴方にありのままの表現を求めることにとどまっている三重吉の綴方教育論との大きな相違点であった<sup>7)</sup>。

ただし、このような綴方教育論は、木村が1930年に至って初めて示したものであるということではない。そこで、こうした綴方観はいつごろに形成されたものかについて、確認してみたい。

木村は、1918年の『赤い鳥』創刊時から同誌を読んだり、綴方を投稿していたわけではない。創刊から5年目にあたる1922年頃、たまたま手にした『赤い鳥』の入選作の綴方をみて自らが指導した綴方との共通性を見出し、自らが指導した綴方を投稿してみた<sup>8)</sup>。その結果、1922年8月号には高等科一年の新栄とよの「櫓」、9月号には高等科二年の釣谷くくの「兄の病氣」、10月号には高

等科二年の川口良子<sup>9)</sup>の「右の手」と、続けて掲載されることとなったのである<sup>10)</sup>。それらのうち、川口良子の「右の手」の全文は次のものである。

### 右の手

高二 川口良子

私は二つの時、匍つて行つて熱い湯の中へ右の手を入れて火傷をしたので、すぐ医者にかゝつたさうですが、下手なのか、とうとう右の手が曲つてしまひました。それは手が痛いので曲げてみたのを、そのまゝ繃帯してゐる中に皮が付いてとうとう曲つたのださうです。小さい時にはさう気にも掛けませんでした。今は手の延びるに従つて中の皮が縮つて行くのです。尋常五年の体操の時、先生が「どうして手を上げない。こうして上げれ」と教へてをりました。その時、私は自分の手の曲つてゐるのにも気づかず、自分も他人と同じやうに、真直ぐに上げてゐるものだと思つてをりました。その時先生は教壇の上から、「こら、どうして手をすつかり延ばさない、どしがつ」と怒鳴りました。はつと思つて自分の手を見れば、悲しいことに自分の手は曲つてゐるのであります。私は悲しくて悲しくて、それから二三日は何を聞かれても、自分は覚えてゐながら手を挙げませんでした。高等科に入つても私の手の曲つてゐるのを知らない人は、珍らしさうに聞いたり、又何か伝染する病のやうに思つて距てる人もありました。私は知らぬ振をして遊んでゐましたが、手毬をつく時など、人が沢山たかれば恥しいやうな気がして顔がほてつて来るのでした。凝念の時、先生が右手を上げれとか、左手を上げれとかいひますが、その時も私は恥かしくて恥かしくてそつと、低く上げてをりました。右の手を上げれば何ともいはれない恥かしさと悲しみが湧いて来るのです。その内に後の方で笑ふやうな声がしました。私は自分の手を笑つて居るのかと思つてぎつしり手を握つてしまひました。暫くするうちに、男生が私の手を見て、くすくす笑つてゐるのでした。私は手を下せば先生に叱られるし、上げれば笑はれるしと思つて手を上げたり下げた

りして居りました。その間も絶えず先生に叱られはしないかと、はかばかして居りましたが、いゝあんばいに見付けられずそれですみました。<sup>11)</sup>

ここには、幼い時の火傷によって曲つてしまつた右手のせいで、真直ぐに手を挙げていないとして教師に叱られたり、級友からからかわれたり、からかわれることを恐れて手を高くは上げないことで教師に叱られるのではないかと心配したりというような、長年にわたる悩みが綴られている。

この「右の手」について、三重吉は『赤い鳥』において、次のように評している。

「川口良子さんののは、女の子としてきまりを悪がる心持が哀れなほどよく写されてゐます。ほかの子たちが伝染でもするやうに逃げるのいたりするのはあんまりですね。併しさういつまでも恥かしがつたところで仕方ありません。全然平気になつておしまひなさい<sup>12)</sup>」

評の一文目において、描写について賞賛していることは、三重吉の評に共通する特徴である。二文目において、級友たちの行動についての作者の思いに共感していることと、三文目において、気にしてもしょうがないから気にしないやうにと作者に助言をしており、三重吉の関心が表現にとどまらず作者にも及んでいることがわかる。そして、三重吉の関心が作者に向けられはじめたことは、「右の手」が作者の長年の悩みを綴つたものであり、三重吉もおのずと作者への共感や助言を明らかにすることとなったものとみられる。ちなみに、この「右の手」が『赤い鳥』に掲載されたことについて、後年、古田足日は、『赤い鳥』の綴方の「自己表現はただ子どもが興味を感じたことからの表現だけではなかつた。このやうに、人間性の主張になって現われてくる<sup>13)</sup>」と新たな動向が生まれたものとしてとらえている。

木村は、この「右の手」など『赤い鳥』に入選した綴方を中心とした文集『綴方生活 村の子供』（謄写刷私家版、1924年）を発行している。

『赤い鳥』に入選した際の三重吉の評も収録されている。ただし、木村の評はない。

その後、木村は、『村の子供』第二集（謄写刷私家版、1925年）も発行し、二冊の謄写刷私家版を再編集した『綴方生活 村の子供』（文園社、1927年）を発行した。その際には、三重吉の評に加えて一部の綴方には木村の評も付された。「右の手」にも、次のような木村の評がある。

「文は中々力のこもつたものですが考方はこれでいゝでしやうか、少女の時代の事だから恥しがらるのも無理はありませんが自分の過失でもないのですから、少し心を大きく持てば何でもない事です。いや作者は恥かしいと書いてあるけれどもかうした文に綴る処などから次第に恥かしくな（くな——引用者による）りつゝあると思はれます。文を綴ることによつてかうした考察から人は漸々目がさめて行く、下らぬ事には委縮しない、大きい強い公明な、人を恐れない力がぐんぐん育つて行くと思ひます<sup>14)</sup>」

木村は、まず、作者が自分の悩みを具体的に綴っていることを評価している。その上で、こうしたことを恥ずかしがる作者について、恥ずかしがるようなことではないと、いったんは説いている。しかし、木村は、作者が文章表現として明確に示しているわけではないが、綴友たちがからかうのをやめてほしいとか、教師も理解してほしいという思いを勇気を出して書いたものであり、こうしたことを書いたこと自体が、作者が恥ずかしく思うことを乗り越えようとしていることを読みとって励ましているのである。

このように見てくると、巻頭に三重吉の「序」が掲載された『綴方生活 村の子供』（文園社、1927年）には、「右の手」とともに三重吉と木村の評も収録されており、そこには両者の評の異同が明らかになっていたことになる。つまり、木村が1930年に『綴方生活』の一文で記した考え方は、すでに1927年には示されていたことであった。

ここで検討してきたことは、三重吉と木村の師弟関係の解消の原因が綴方教育論の相違によるものであったとしても、その相違は遅くとも1927年の時点では明らかになっており、1930年に至って初めて明らかになったものではないということである。ただ、その相違は、綴方の作者に直接に接することのない雑誌の綴方欄の選者の立場と、綴方の作者と常に接している教員という立場の違いに起因する面もあった。したがって、綴方教育論の異同にかかわらず、木村が三重吉の文章表現技術に学ぶものがあると見ていたのであるならば、師弟関係が続いていたこと自体はありうることである。

このようにみてくると、三重吉と木村の師弟関係が解消されたのは1930年頃であったものの、この時期に三重吉と木村の綴方教育論の相違が初めて顕在化したというわけではない。むしろ、木村が三重吉の綴方教育論の範疇にとどまらない綴方教育論と実践とをおさめた『村の綴り方』でもって綴方教育界の論客の一人として登場したことを象徴するできごとであったということができよう。

## 第二節 「綴方生活」の成語化

「綴方生活」という用語は、今日においては前出の『綴方生活』の誌名として知られてはいるものの、その他の用例はほとんど知られてはこなかった。ただし、すでに本稿で言及してきたように、木村は、『綴方生活 村の子供』（謄写刷私家版）や『綴方生活 村の子供』（文園社）の書名として「綴方生活」を用いている。ここでは、「綴方生活」という用語について検討するために、『綴方生活』の創刊の際の命名の経緯と、それよりも先に「綴方生活」（あるいは「綴り方生活」）を成語化して用いていた木村と小砂丘忠義（1897-1937）に即して考えていくこととする<sup>15)</sup>。

### 1. 『綴方生活』の命名

1929年10月に『綴方生活』が創刊された、誌名の命名について、小砂丘は、野村芳兵衛と上田庄

三郎との三人で創刊準備に取り掛かっていた時のこととして「昭和四年四月ごろ、三人は屢僕の家を集つて案を練つたものだ。その都度、話題には上りつゝも一向に成案を得るに至らず次回へ次回へと持ち越すのが雑誌の名まへであつた<sup>16)</sup>」というところまでは述べているが、その後、どういう経緯で誌名が『綴方生活』に決まったかについてはまったく言及してはいない。また、同誌創刊号の巻頭言「吾等の使命」には、「『綴方生活』は教育に於ける『生活』の重要性を主張する。生活重視は実に吾等のスローガンである<sup>17)</sup>」とする文言において、「生活の重要性」や「生活重視」ということは述べられているものの「綴方生活」という用語の内容を示すものはない。「綴方生活は新興の精神に基き常に清新澆刺たる理性と情熱とを以て斯界の革新建設を企図する」とカギ括弧のつかない「綴方生活」もみられるが、これは誌名のことであり、「綴方生活」の意味を述べたものではない。

また、『綴方生活』という誌名について、志垣寛（『綴方生活』創刊時の主幹）は「綴方生活！綴方生活！綴方生活！何度くり返してもいい名だ<sup>18)</sup>」と自賛しているが、ここでも「綴方生活」という用語の来歴や意味についてはまったく言及がない。誌名への消極的な感想としては、五味義武（東京女子高等師範学校訓導）が「綴方生活では一寸題が狭いやうにも思ふが、もう名のりをあげてしまつたら仕方がない<sup>19)</sup>」と述べていることが確認される。志垣と五味のとらえ方をみると、賛否は分かれているが、「綴方生活」という用語自体は当時において斬新なものであったものとみられる。

## 2. 木村文助のいう「綴方生活」

すでに言及して来たように、木村は、1924年の謄写刷私家版と1927年の市販本の書名に「綴方生活」を成語化して用いていた。ただし、いずれの書においても、「綴方生活」という用語そのものについての言及はみられない。1927年の謄写刷私家版の巻頭の「この集をよまるゝ人に」において

は「私は生活に立脚しごまかさず誇張せず正しく人生を見て行くところに綴方の価値を置くものである<sup>20)</sup>」と、生活に立脚して人生を見るものとして、綴方の意義を認めている。そして、子どもたちは綴ることによって生き方を発見して行くとして、次のように述べている。

「子供の露骨な真剣な文を見て教師は其の事柄を是認し奨励するかの如く見るものがある。之全く見当違ひである。子供は事実を事実として正視凝視してゐる。さうして次第に反省考慮し正しく生きる路を発見するものである<sup>21)</sup>」

つまり、子どもは生活を綴方に綴ることによって事実を思い返して、自らの考え方や行動を振り返り、新たな方向を見出すことになるものとして、木村において、綴方教育の意味付けは明確になっていたことがわかる。

木村の論文で「綴方生活」という用語が用いられるのは、1926年においてである。「綴方生活」という用語は次のような文脈で用いられている。

「自分は囊に綴方の教育は生活内面を發展に導くにある事を論じたが作者の立場に立つて此の関係を眺める時三段の経路を経る事を思ふのである。

第一は自己を知る、もつと適切にいへば自己を発見する事である。自分は如何なる人間か、書く時の自己反省により書いたものからそこに正直につき出された自己を凝視して、本当の自己を発見するのである。今一つの回想を書いたものとせば『正しく自分は公明といへるか、卑劣でなかつたか、野心的に動いたのでなかつたか』といふ如き、つまり自分の精神の純否を懸引なしにそこに観られるのである。（中略）此時若し非なるものがあれば第二段として旧時の自己が破壊され第三段の自己改造が行はれる。かくて第一を征伐し消化し優越となつた自己が残るのである。生活の意義は絶えざる此三段の繰返しであるともいひ得る。否此三段が同時的に行はれ自己

創造をなすとも新生をなすともいひ得るが仮に三段に分解していつた迄である。つまり自己創造新生の動機を創作生活、綴方生活によってせしむるといふ事である<sup>22)</sup>」

第一段階は綴方を綴ることで自己を発見すること、第二段階は第一段階において非があったことがわかれば破壊すること、第三段階はあらたな自己を創造することである。もちろん、これらは三段階にわかれずに同時におこなわれることもあるとみる。ここで主張されていることは、綴方を綴ることによって自己を発見して、自己の評価をおこない、必要な自己の創造をすすめるということである。木村は、このように、生活を綴ることを通して自己創造を行うことを「綴方生活」という用語で表現しているということとなる。

ちなみに、この引用部分は、1923年の木村論文を想起させる。1926年論文の下線部分と次に引用する1923年論文の下線部分を比較すると、内容的にはほぼ同じということが言える。

「真の綴方は単なる発表に止まらずして、人生に唯一無二の根柢を有し之を深め高める為に、真に自由に徹底的に自己を発見し、破壊し、創造すべく、模倣的な因襲的な見方を一擲して、其実真剣に自己自身の力を以て直接人生に触れ、之を思想し其発展向上を計るものでなければならぬ<sup>23)</sup>」

つまり、木村が自らの綴方教育論を示す際に「綴方生活」という用語を用いたのは1926年であるが、その考え方自体は1923年に示されていたということになる。

### 3. 小砂丘忠義のいう「綴り方生活」

小砂丘は、自伝的な一文「私の綴り方生活」(『教育の世紀』1926年6月号と9月号に連載)を書いている。後半(9月号)においては、サブタイトルの「教壇に立つて」に示されているように、自らの小学校教員時代の綴方教育実践を記したものであり、タイトルと内容との間での違和感はない。ところが、前半(6月号)は「一 物心づく頃」からはじまって「二 小学時代」、「三

師範時代」と続くものであり、文章を綴る綴方に関しては「所謂綴り方といふものについて一寸でも感じをもつたのは尋常四年の時である<sup>24)</sup>」というようなものとなっている。小砂丘においては、物心がついてから尋常4年に至る時期においても「綴方生活」としてとらえられることがあったということとなり、それは、いわゆる綴方のことにとどまらないものということとなる。たしかに、小砂丘は、就学前の時期について記した「一、物心づく頃」において、祖母から聞かされた賽の河原の地蔵和讃や石の塔を組む子どもの話を記憶していること、父母と共に植林地の掘立小屋で生活していたときに桃太郎の話を兄弟三人で芝居にしたりして遊んでいたこと、植林地に働きに来ていた人々についておぼろげながら記憶していること、木の実や小鳥をとったり木の香りが匂いが好きだったり花の香りを楽しんだことなどを記憶していることなどを記している。それらのうち、7歳か8歳の頃の植林地での体験について具体的にみると、次のように記されている。

「向こうに見えた滝のすつかり氷つたさまや、何ともいへず春さきの木の匂がすきでたまらなかつたこと、三椶の花を嗅いで楽しんだこと、そこから私に若しあるとすれば、色々な、私のための芽生えが出て来たと思ふ<sup>25)</sup>」

滝が凍った様子や木の匂いが好きだったということや三椶の花の香りを楽しんだことを、小砂丘は「私のための芽生え」ととらえている。つまり、自然の事物が呈している魅力に気付いて小砂丘が積極的に反応していたことが自らにとって意味のあることであったと見ているということになる。

小砂丘は、「二、小学時代」、「三、師範時代」まで書いたところで、「綴り方生活とは私の考へでは、私の受容、発表の生活の大部分である<sup>26)</sup>」と記している。小砂丘の言う「綴り方生活」とは受容と発表とを意味するということとなる。それは、幅広い意味での受容と発表ということにとどまらず、文字や文章が書けるようになれば、いわ

ゆる綴方そのものが受容と発表の手段ともなるものである。小砂丘は、こうした意味で、受容から発表に至る過程を「綴り方生活」としてとらえているものとみられる。

#### 4. 「綴方生活」「綴り方生活」と『綴方生活』

ここで、あらためて、木村と小砂丘の「綴方生活」（「綴り方生活」）という用語の使用について整理してみる。

木村は1924年に謄写刷私家版の書名に用いたあと、1926年7月の論文中で用いた。また、小砂丘は、1926年6月と9月の論文タイトルと論文中で用いた。つまり、論文で使用した時期で言えば、ほぼ同時期ということとなる。当然のことながら、木村と小砂丘との間において意味することは同じではないが、綴方の役割を自己発見から創造の過程に、また、受容から発表の過程に、つまり自己形成の過程に位置付けるという点において共通性があるとともに、木村と小砂丘の両者において重要な用語となっている。

木村の前出の謄写刷私家版の文集は再編集されて、1927年4月に文園社から『綴方生活 村の子供』として出版された。小砂丘は高知県の小学校の訓導兼校長を辞して1925年12月に上京して『教育の世紀』（教育の世紀社）の編集者をつとめていたが、併行して1926年秋からは児童雑誌『読方綴方 鑑賞文選』（文園社）の編集にもかかわったあと、1927年1月には、文園社に入社して『読方綴方 鑑賞文選』の編集者となった<sup>27)</sup>。木村の『綴方生活 村の子供』（文園社）が出版されたのは、小砂丘が文園社に入社して4か月目のことであつた。こうしてみると、1927年に文園社において木村の「綴方生活」と小砂丘の「綴り方生活」が＜出会う＞こととなったこととなる。

木村や小砂丘よりも前の時期における「綴方生活」（「綴り方生活」）の使用例が確認されない今日において、それらは木村と小砂丘によって成語化されたものとみてよいであろう。そして、木村と小砂丘のそれぞれの綴方教育論を示す「綴方生活」（「綴り方生活」）という用語が、1930年代を

目前にして、『綴方生活』という誌名をとおして広く知られることとなったということができよう。

## 第二章 生活現実の問題と綴方

### 第一節 『村の綴り方』の反響—近藤益雄の場合—

前述したように、木村は『村の綴り方』（厚生閣、1929年）を出版した。当然のことながら、本書の反響の検証を行うことは容易なことではないし、そのことを追求しようとするものでもない。ここでは、本書と『綴方生活 村の子供』（文園社）を読んで当初は木村の綴方教育に共感して実践を試みたのちに、間もなくその実践をやめて方向転換をすることになったことを自ら明らかにしている近藤益雄（1907-1964）の場合に即して検討して行くこととする。

近藤は、1927年に長崎県の小学校の代用教員となった。1928年には純農村の上志佐小学校に異動して牧歌的な綴方教育をしていた。そうしたなかで、木村の『綴方生活 村の子供』や『村の綴り方』等と出会って大きな衝撃をうけたという。

ここで、近藤が『村の綴り方』に合わせて読んだという『綴方生活 村の子供』に収録された綴方の選択基準について木村が記していることを確認しておく、次のようになる。

「綴方は厳粛な自己生活全人格の現はれでなければならぬ。全人間を通しての生活の記録でなければならぬ。個性、人格のない単なる文字の羅列、記憶の再現は辛うじて綴方の範囲に入るとしても、価値の低しとする<sup>28)</sup>」

「内容を成す材料は或程度の過失でも、赤裸々の表現でもよいが、価値（大人でなく、児童にとり）あるものなければならぬ<sup>29)</sup>」

「他人の秘密を曝露し、他児童の好奇心を挑発する如き性質のものは、動機、態度が純正であつたら、綴方としてはあつてもよいが、公表すべきものではない<sup>30)</sup>」

文集への収録にあたっては、作者にとって価値のある題材でなければならぬとか、他人の秘密

を暴露したものは公表しないなどの基準はあるが、日常の指導においては、綴方の題材や表現に関しては子どもの判断にゆだねている面が多いことがうかがえる。

木村の著書と文集の二冊を読んだ後のこととして、近藤は次のように記している。

「私は唯驚いた。恐怖をさへ感じた。そしてそれまでの私の綴方営為を一日も早く清算してしまはねばならぬ焦燥を感じた。私の思ふことは、自然よりも人間であつた。純朴な村びとの生活を礼賛する気もちが、漸く消失して行つて、段々経済不況に喘ぎ出して来た農村の子供の姿を凝視する気持であつた<sup>31)</sup>」

木村の綴方教育においては、子どもたちの生活や家族の生活、近所で見聞したこと等が綴られている。そうしたものを綴らせなければならぬと近藤は受け止めて、子どもたちに書かせたものとみられる。その結果は、次の様なものだったという。

「家庭内におこる様々な暗い現実を歎く子供も出て来た。財産整理、父と叔父との抗争、家族の病気、等々、さういふ暗い事実が、私の視野に浮き出して来た。それはどうにもごまかしやうのない現実であつた<sup>32)</sup>」

ここに挙げられていることから察せられることは、家庭で起こった深刻な事態を見聞したことが綴方として報告されてくるということである。

こうした綴方について、近藤は次のように見た。

「生活のある綴方——さうだつた。それは単に生活のある綴方で、決して生活する綴方でも生活させる綴方でもなかつた。生活の綴方ではなかつた。生活意欲の綴方でもなかつた<sup>33)</sup>」

こうした内容の綴方に対して、近藤は「生活のありのままを暴露した綴方ではあつた<sup>34)</sup>」が、「如何に生活的に統制すべきかを指導することも私には出来なかつた<sup>35)</sup>」という。

近藤は、こうした綴方に対して「提出されると私はすぐ、文字、語法を訂正し、文章上の技術を指導し、簡単な表現上の批評を付して、作品は子

供に返した<sup>36)</sup>」という。つまり、子どもたちの生活に即した綴方教育をするつもりだったのだが、綴方の内容を学級に示すことができず、個々人に対する表現技術の指導になってしまったということとなる。そして、内容については、「子供を呼んで慰めてやつた。ほんとに慰めてやるだけであつた<sup>37)</sup>」という。

そうしたところに、調べる綴方の主張があらわれた。「綴り方と言へば、文芸的な——それも自然主義的な——深刻な生活描写でなければならぬと固く信じてゐた」のを「清算したつもりで、科学的な綴り方、調べる綴り方へその方向を転じて行つた<sup>38)</sup>」という。

近藤は調べる綴方の実践を始めた。ただし、方向転換した調べる綴方実践も、満足できるものではなかつた。

「出来上がった作品はどれも迫力に乏しく、個性が全然表れない、至極退屈なものが多かつた。然し前の生活バクロの綴り方と異つて、ここには、秘密を要するような問題がなかつたので、作品処理の仕事も、共同で統制的に行ふことが出来た<sup>39)</sup>」

近藤において、調べる綴方は退屈なものであつたが、「暴露」の文芸綴方よりはましなものであつたということになる。しかし、調べる綴方の内容についても、満足できるものではなかつた。

「殊に郷土主義の色彩の濃厚な作品が多かつたために、郷土地理、郷土史、郷土の土産、民俗、郷土の生物学等々の学習の如き観を呈して来た。子どもたちはかうした仕事の中で、郷土に対する真の認識を獲得しはしなかつた。好事家的な、低回趣味が、子供の頭脳を支配してゐた<sup>40)</sup>」

近藤が木村の綴方教育論から学んだものとしておこなつた実践は「暴露」の綴方であつた。そして、その「暴露」の綴方から方向転換したものが調べる綴方であつた。

近藤にみられるような調べる綴方への関心は、近藤だけのものではなかつた。



1933年の時点において近藤は、「過去の文芸至上の綴方から科学的実用的綴方へ——綴方は拡充し転向し建て直されてゆきつゝある<sup>41)</sup>」と述べて、自らの方向転換が同時代の綴方教育界の大方の動向と軌を一にするものにとらえている。

こうしてみると、1930年代において、木村の綴方教育論は批判克服の対象とされ、それにかわるものとして調べる綴方への方向転換の契機とされていたことになる。

## 第二節 木村のプロレタリア綴方論

木村は、1930年に「第三期綴方論」を書いた。第三期というとき、第一期は1900年の小学校令改正による国語科綴り方の発足以降の時期、第二期は1916年の芦田恵之助による随意選題綴方提唱以降の児童中心主義の時期にとらえていた。そして、第三期は、1930年以降のプロレタリア綴方が生まれ始めたことを画期とするというものであった。

このことは、木村が、階級意識を先行させたようなプロレタリア綴方を推奨したということではない。それは、木村が1930年を「社会的平等認識を要求する時代で、プロ文学の影響をうけた、プロ綴方時代とも言ふべく<sup>42)</sup>」と見たためであった。

「今までの余りに内向的、身辺的に狭かつた点に省み、社会関心の萌芽でも、断片でも大事に保護し、外的社会的に発展拡張しなければ新らしい堅実な時代認識は得られないとして見る時新ら一つの目標として仰がれるのであるからこゝに一時期を画し得るものと信ずる<sup>43)</sup>」

木村は、これまで綴方の題材やテーマが作者自身の内面や身辺にとどまりがちであったものが、1930年代を迎えてプロレタリア文学等の影響を受けて、綴方にも社会への関心が反映してきたということを根拠にあげている。

そして、プロレタリア綴方にかかわる論議について、木村は、次のように述べている。

「プロ綴り方は昨年（1929年—引用者）あたりから盛んに論ぜられる様になつた。一体プロとは何であるか。プロ綴り方とは何であるか、先づこれからきめてかゝらなければならない順序であるが、夫はもう論じ尽された問題であるから今更繰返す必要もない。だが、夫れで万事が解決してゐるのでは決してない<sup>44)</sup>」

ここで木村は、1929年あたりからプロレタリア綴方にかかわる論議が盛んになり、すでに論じ尽くされたとする。しかし、教育雑誌等て断片的に話題になってはいるが、「盛んに」とか「論じ尽された」といえるほどの状況ではなかった。木村も、そうした論議がどこでどのようにされたのかに関しては、ほとんど言及してはいない。木村が取り上げているのは、上田庄三郎が「綴り方教育の新拓野」（『綴方生活』1929年12月号）において尋常4年男子の綴方「今の世の中」を肯定的に評価したことに関するのみである。木村は、上田が高く評価した「今の世の中」について、「此論に多分の真理があるとしても、夫れは児童が一生懸命つきつめて考へたのではなく、実はいつか（本人が意識しなくとも）大人から聞いた話をいゝ加減に綴り合せたのではあるまいか<sup>45)</sup>」と観念先行の綴方とみて、上田の評価に異を唱えている。

そのような木村の上田への批判について、田部久は木村の論述を450字ほども引用しつつ次のように批判している。

「氏は、子供が大学生の生活を批判することはよくない、又批判できる能力をも持たない。唯公平の批判は、こうした生活を理解し得る人（ブルジョア、プチブル）によつてなされ得るもので、子供や、プロレタリアがそれを客観的に批判することは正しくないとおつしやる。（略）氏は物を客観的に見て行く科学的態度を拒否され、排撃される、従つて、反動的教育家といはなければならない<sup>46)</sup>」

田部によるこうした批判に対して、木村は次のように的外れの批判であると反論している。

「嘗て本誌（『綴方教育』——引用者）にプロ

綴り方の事を論じ、或文例として（プロ文例でなく）高師児童『今の世の中』は名文だといふがさうではないと理由を挙げて反駁した事があつた。それが『プロレタリア<sup>くママ</sup>指導理論』といふ本に引用され、此文は『「氏」（私一筆者註）によれば極端なプロ綴方な事になる』がどつちも間違つてゐると其プロ文でない理由を諄々と説いて御出になる、が、ハハハハ冗談でない。（略）自分はどこにもプロ文だといつた覚はない。『世間ではこんなものをプロ名文などと賞賛してゐるが、子供の中はすべて生活として見るべきだ』とし些とも名文でないといつてゐる筈だ<sup>47)</sup>」

上田と木村と田部による論議は、小学生が大人の行動を批判していることをめぐるものである。上田はプロレタリア綴方として評価し、木村はそれは実際には子どもの綴方とはみなせないものとし、田部は、上田がプロレタリア綴方として評価しているとして批判し、木村も極端なプロレタリア綴方とみなしているとして批判するもので、かみ合ったものではなかった。

しかしながら、貧困は現実の問題として存在する。したがって、観念先行のプロレタリア綴方を批判するだけでは問題の解決にはならないとして、木村は次のように言う。

「だが夫で万事が解決してゐるのではない。それらの論だけではまだ表面で實際上の役に立たない。之を実際につき作品に即して、どこがどうしてプロであり、生活と交渉あるかの研究が、次いでなければならぬが、夫が案外忘れられてゐる。一体児童に対し、作品に対しては抽象的なプロもブルもあるものではない。事実即し之に適応した生活指導があるだけである<sup>48)</sup>」

木村がこのように述べて、検討の際に例示したものは、自らが指導した高等科1年男子の綴方「貰つた銭」と高等科1年男子の綴方「冬休中の一日」であつた。作者名のみならず、書かれた時期や学校名は明示されてはいないが、「貰つた銭」

は大地主のいる村での駄賃をめぐって、また「冬休中の一日」は山間部の掘立小屋での生活について綴られたものである。こうした環境をふまえると、木村が勤務したことのある学校で該当するのは、1915年度と1916年度の2年間、訓導兼校長として勤務した北秋田郡前田尋常高等小学校のみであつた<sup>49)</sup>。したがって、木村は、15年ほど前の時期の綴方を例示して、プロレタリア綴方について論じたということになる。

「冬休中の一日」は、朝、目を覚ますと木の皮で作られた壁の隙間から寒風が吹いているのが見えることから書き始められており、綴られていることすべてがつつましい生活である。

木村は、この作者の課題について、貧困の「原因が何であるか、社会的なものか個人的なものか（略）此文では未だ明らかでないし、考へようともしてゐない。作者にもはつきりわからないかも知れない、これは次第に目を開かせていかねばならない<sup>50)</sup>」として、作者が貧困の原因を確かめて改善策を得ることにあるとみている。

また、この「冬休中の一日」がプロレタリア綴方といえるか否かについては次のように述べている。

「これは十分な意味でプロの文とはいはれまい。単に貧窮な生活を書いたのでさへ、プロの標本としてゐる人もあるが、本当のプロ綴方は階級意識が本にならなければならない<sup>51)</sup>」

「これは十分な意味でプロの文とはいはれまい」という文言は、プロレタリア綴方としては不十分なものであるということである。これを文字面だけで読んでいくと、このままではプロレタリア綴方としては不十分なものだから十分なものにして行かなければならない、と読めないこともない。しかし、当時も現在も、公教育において確固とした階級意識に裏付けられたプロレタリア綴方を求めることはあり得ないことである。こうしたことを考慮すると、木村の叙述は、生活をありのままに綴った際に貧困な生活などが描かれることがあり、それが「プロレタリア綴方」（あるいは「貧

乏綴方」) であるとして非難される場合があるが、それは生活事実を綴ったものであって、プロレタリア綴方であるかのように非難されるべきものではない、本物のプロレタリア綴方であるためには確固とした階級意識に裏付けられたものでなければならぬが子どもの綴方にそうしたものが生まれるはずもない、というものであったとみられる。

### おわりに

近藤が、木村の著書や文集に衝撃を受けて自らの実践に取り入れようとしたもの間もなく調べ綴方へ方向転換したということ明らかにしたのは1933年のことであり、1930年に木村がプロレタリア綴方論を書いたこととの直接の関係はない。ただ、1930年前後に経済恐慌や経済不況の深刻化、階級闘争の激化、貧困化の進行などによって、社会の問題が綴方にも反映してくることとなる。社会問題や貧困の問題が反映した綴方が「プロレタリア綴方」であるかのように非難されたり、そうした非難をさけるために教師が指導を躊躇したりする動きの中で、木村の綴方教育論は文芸主義として過去のものであるかのような批判がなされることがあった。そうした状況を踏まえれば、木村のプロレタリア綴方論は、近藤に見られるような方向転換への異議申し立てということとなる。

木村が1930年の時点で、1930年以降を「第三期綴方」の時期として区分して「第三期綴方論」を書いたのは、1930年代の綴方教育のあるべき方向についての提言であった。そこで示された木村の綴方教育論は、直ちに受け止められたとはいえないが、1930年代半ばになって、再評価される機運が生じている。たとえば、村山俊太郎は「生活綴方の停止状況を歎かねばならぬのは一体何故であろうか」と自問しつつ、「児童のモラルを組織する生活綴方の具象的な発展のモメントがこの赤い鳥を中心とする文芸的綴方の中に認め得られる」と指摘している<sup>52)</sup>。『赤い鳥』を中心とする文芸

的綴方とは、木村の指導した綴方のことであった。また、野村芳兵衛は「木村文助氏の指導された児童文などは、赤い鳥綴方のなかでも、モラルを濃厚に意欲してあるものが多い」と、具体的に木村の名前を挙げて指摘していた<sup>53)</sup>。

なぜ、1930年代半ばになって木村の綴方教育論が再評価されることとなったのかについての検討は、機会を改めることとする。

- 
- 1) 滑川道夫『日本作文綴方教育史 3 昭和篇 I』国土社、1983年、p.284
  - 2) 『翻刻・校訂 木村文助著「綴方概論」』太郎良信、2020年、p.226
  - 3) 木村文助「第三期綴方論」(『国語教育』1930年12月号)には理科や地理の学習の成果を整理して書いたものについて「非綴方なる理由の下に、記述を軽んじ又は全々綴方の圏外に追出す程潔癖ではない」(p.19)とあり、内容的には対応しているが、木村不二男が『綴方生活』のこととしていること(後述する)とは整合しない。
  - 4) 木村不二男は文助の長男。不二男は、1930年5月に北海道の小学校教員を退職して上京、文化学院に入学して文学を学び、あわせて、三重吉に師事している。三重吉を訪ねた際、三重吉に「親父は破門だが貴様はよさそうだ、困ったらきやがれ」(木村不二男『文学的自叙伝』山音文学会、1964年、本書にはノンプルはないがp.112に相当)と言われたという。
  - 5) 木村不二男『北海道生まれの作家』山音文学会、1970年、p.181
  - 6) 木村文助「綴方座談会所感」『綴方生活』1930年2月号、p.37
  - 7) 太郎良信「木村文助と鈴木三重吉の綴方教育論の異同の検討」『教育研究ジャーナル』第10巻第2号、文教大学大学院教育学研究科、2017年、参照。
  - 8) 木村文助「綴方二十年(二)」(『国語と人生』

- 第9号, 1926年)に「偶然——真に偶然手に触れたのは雑誌『赤い鳥』であつた。名は聞いた事があるが未だ見た事はなかつた。処々童話劇をやる必要上借りて来て中の綴方を見た。そは如何にも自分等のと似てゐたので今迄嘗て投書等した事がなかつたが試に五六編を送つたのである」(p.19)とある。
- 9) 川口よしの別表記。太郎良信「木村文助における綴方教育の模索と展開」『教育学部紀要』第52集, 文教大学教育学部, 2018年, p.146参照。
- 10) 1921年度の作品である。同前論文, 同ページ参照。
- 11) 木村文助編『綴方生活 村の子供』文園社, 1927年, pp.73-75. 初出は『赤い鳥』1922年10月号であるが, そこでは「右の手」であるべきところが「左の手」とあるなど明らかな誤植がある。
- 12) 木村文助編『綴方生活 村の子供』前出書, p.75
- 13) 古田足日「前期『赤い鳥』と生活綴方」編集委員会編『生活綴方の探究』誠信書房, 1958年, p.114
- 14) 木村文助『綴方生活 村の子供』前出, p.75  
木村は『綴方生活 村の子供』(謄写刷私家版, 1924年)の巻頭「この集をよまるゝ人に」において「原稿には児童三名の評及編者の評がついてあるが多少参考となる編者の評二, 三以外は全部除くことにした」(ノンブルなし)と述べており, 私家版の原稿には「右の手」についての児童や木村の評があつたものとみられる。児童や木村の評が, 綴方が書かれた時期のものであれば1921年度のものとなるが, 未詳である。
- 15) この部分は, 太郎良信「『綴方生活』という用語」(『赤い鳥事典』柏書房, 2018年)および太郎良信「『綴方生活』という成語のルーツを考える」(『綴方茶話』第24号, 小砂丘忠義記念館, 2019年)とを大幅に拡充したものである。
- 16) 小砂丘忠義「窓」『綴方生活』1937年2月号, p.38
- 17) 「吾等の使命」『綴方生活』1929年10月号, p.5
- 18) 志垣寛「「時は来た—綴方生活の発刊まで—」『綴方生活』1929年10月号, p.79
- 19) 「別室」同前誌同号, p.96
- 20) 木村文助「この集をよまるゝ人に」前出, ノンブルなし。
- 21) 同前。
- 22) 木村文助「綴方に於ける生活指導の根拠」『国語と人生』第10号, 1926年7月, pp.22-23. 傍点と下線は引用者。
- 23) 木村文助「人生と綴方」『北海教育評論』1923年4月号, p.50, 下線は引用者。
- 24) 小砂丘忠義「私の綴り方生活」『教育の世紀』1926年6月号, p.66
- 25) 同前。
- 26) 同前, p.73, 傍点は引用者。
- 27) 文園社は平凡社の子会社で, 1927年1月に独立した社屋をもった。社長の清藤幸七郎のほかは, 編集者としては池田種生と小砂丘, 画家の立野道正がいるだけの小規模の出版社であつた。太郎良信「『鑑賞文選』と小砂丘忠義(二)」太郎良信『戦前の児童向け綴方雑誌に関する教育史的研究』(科学研究費報告書, 2004年)参照。木村の文集の担当者は未詳である。
- 28) 木村文助編『綴方生活 村の子供』前出書, p.230
- 29) 同前。
- 30) 同前書, p.231
- 31) 近藤益雄「作品処理に関する覚え書」木下龍二編『作品文・詩の処理に関する研究』東宛書房, 1935年, p.364
- 32) 同前, p.364
- 33) 同前, p.365
- 34) 同前, 傍点は引用者。
- 35) 同前, p.365
- 36) 同前, p.366
- 37) 同前。
- 38) 近藤益雄「私の調べる綴り方」千葉春雄編『調べる綴り方の理論と指導実践工作』東宛書

- 房, 1934年, p137
- 39) 近藤益雄「作品処理に関する覚え書」前出,  
p.368, 傍点は引用者.
- 40) 同前, p.369
- 41) 近藤益雄「詩教育報告書」『綴方教育』1993  
年1月号, p.89
- 42) 木村文助「第三期綴方論」『国語教育』1930  
年12月号, p.11
- 43) 同前, pp.13-14
- 44) 木村文助「プロ綴り方とはどんなものか」  
『綴方教育』1930年10月号, p.14
- 45) 同前, p.17
- 46) 田部久『プロレタリア綴方指導理論』自由  
社, 1931年, pp.81-82
- 47) 木村文助「この頃の感想」『綴方教育』1933  
年9月号, p.97
- 48) 木村文助「プロ綴り方とはどんなものか」前  
出, p.14
- 49) 前田尋常高等小学校における綴方教育につい  
ては, 太郎良信「1910年代における木村文助の  
綴方教育の検討」『教育学部紀要』第53集, 文  
教大学教育学部, 2019年, pp.65-71参照.
- 50) 木村文助『悩みの修身』厚生閣, 1932年,  
p.76
- 51) 同前.
- 52) 村山俊太郎「生活綴方の新しい努力」『実践  
国語教育』1936年7月号, p.10
- 53) 野村芳兵衛「新文学精神から観た赤い鳥綴  
方」『教育・国語教育』1936年2月号, p.33